

1. 授業の基本情報

対象授業の「教材の開発と実践(歴史)」は、大学院の教科領域コース科目に相当するものである。本授業は、学習指導要領や教科書に明記されている内容や歴史学の研究成果を踏まえて、教育内容を設定した上で、授業実践をできる力を育成することを目的とする。この目的を果たすために、授業では社会科授業に関する理論とそれに基づく実践について考察を行ったうえで、地域連携実習で行った授業開発・実践の報告を行い、授業改善のための視点や方法について議論を行った。本授業の登録学生数は6名で、全て教育学研究科教育高度化専攻社会コース1回生だった。

2. 授業評価・授業研究の内容

授業評価を行うために①【知識・理解】、②【技能】、③【思考・判断・表現】、④【興味・関心・意欲】に関するアンケート調査を行った。なお、各質問に対して、「1とてもそう思う・2ある程度そう思う・3あまりそう思わない・4授業の目標・内容がこのDPとは無関係である」という四つの選択肢を設定し、2023年2月に調査を実施した。アンケート調査結果（回答数6）は次の通りである。

（1）知識・理解について

【質問内容】歴史の授業開発のための教材研究に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得することができた。

- 1 とてもそう思う 3名
- 2 ある程度そう思う 3名
- 3 あまりそう思わない 0名
- 4 授業の目標・内容がこのDPとは無関係である 0名

（2）技能について

【質問内容】教材研究に取り組むための十分な技能を身に付けることができた。

- 1 とてもそう思う 3名
- 2 ある程度そう思う 3名
- 3 あまりそう思わない 0名
- 4 授業の目標・内容がこのDPとは無関係である 0名

（3）思考・判断・表現について

【質問内容】歴史の授業開発のための教材研究をすすめるうえで生じる課題について、専門的な知見をもとに対応策を考え、その過程

や結果を適切に表現することができるようになった。

- 1 とてもそう思う 4名
- 2 ある程度そう思う 2名
- 3 あまりそう思わない 0名
- 4 授業の目標・内容がこのDPとは無関係である 0名

（4）興味・関心・意欲について

【質問内容】社会科教師としての使命感や責任感を持ち、歴史の授業開発に関する課題を明確にして理論と実践とを結び付けた主体的な学習ができるようになった。

- 1 とてもそう思う 6名
- 2 ある程度そう思う 0名
- 3 あまりそう思わない 0名
- 4 授業の目標・内容がこのDPとは無関係である 0名

（5）本授業の振り返り（自由記述）

【質問内容】本授業について、歴史授業の「理論と実践の往還」という視点から振り返り、もっと学びたいと思うようになったことを含めてあなたの考えを記入してください。

【主な意見】

○本講義を通して、レリバンスの視点から歴史授業をどのように展開するかについて考えた。なぜ歴史を学習するのか。従来、子どもの外側にある価値を子ども自身が見出し、学ぶことが当たり前と考えられていた。確かに、歴史学の学問的研究成果の視点から見ると学び継承するだけの価値がある事象と言えるかもしれない。あるいは、わが国が形成されてきた複雑な過程を学ぶことはわが国に生きる国民（例えば世界の中のわが国と捉えれば、市民とも言える）責任とも言えるかもしれない。しかし、そのような価値を子どもと対峙させたとき、どのように価値を見出せばよいか分からず、あるいは学問的研究においても語られず、学ぶべき事項として学習内容はより細かく網羅的に設定されるのみである。このとき、子どもと歴史学習が乖離する。そこで、レリバンスが注目される。レリバンスはそのような歴史を学ぶ価値と子どもとの乖離を解消していく視点である。平たく言えば、子どもが学びたいと思える授業の内容や方法について検討できているかと考える教師に向けられた起点であると捉える。本講義におけ

るテキストでも取り上げられ、レリバンスの概念を提唱したシュッツは、反証が無い限りにおいて特別な検討を必要とせず、第三者により既に経験され解釈されたものとして理解される「物事が自明とされる領域」を設定している。そしてこの領域を、私たちの関心に応じて、様々な知識の程度を必要とする有意性の強度が異なる4つの領域に分割してレリバンスを説明している。歴史的事象と子どもが出会うときは「物事が自明とされる領域」から始まり、教師の教材選択や指導方法によってその領域が少しずつ変化する。ゆえに、子どもが歴史を学ぶことに意味や意義を見出し、既存の価値に迫ることができる、あるいは新たな価値を創出することができる内容や方法を設定する必要がある。そのためには、子どもが自明視している見方・考え方（日常生活における経験、中学校社会科歴史的分野の学習であれば小学校の歴史学習の内容）に疑問を投げかけるような学習課題を設定し、その問いを追究させる中で多面的に歴史認識を深める学習が想定される。一方で、レリバンスを重視することで排除されたり軽視されたりする学習内容が自然と生じる。例えば、小学校学習指導要領における歴史授業では「歴史を学ぶ意味」について、「現在の自分たちの生活と過去の出来事との関わりを考え」ることや「過去の出来事を基に現在及び将来の発展を考え」といったことが示されている。歴史学習の中では、現在の自分たちの生活とつながりが見えにくい内容や、現在及び将来の発展の手掛かりとなりにくい歴史的事象も存在する。このような学習内容をどのように取り扱う必要があるのか、あるいはこのような歴史的事象についてもレリバンスの概念が適用されるのかについて考えていきたい。これを考えることで、子どもが歴史学習に対して価値をより見出すことに繋がるのではなからうか。

○歴史学習のレリバンスを考える上で「歴史分野を学ぶことが、実生活にどのように影響するのか」ということに焦点が当たることがありました。本文では歴史学習離れが起きた原因として、歴史分野では暗記力を問う試験が多いことが挙げられていました。学校教育では、歴史的な思考力や判断力等を働かせることが少なくそれぞれの生徒の興味関心や生活に沿わずに行われてしまうことが課題となっています。現在の歴史学習においては、これらの課題を克服した知識以外の能力を含めた育成を目指し、生徒の身の回りの事象や歴史的な事象同士を関連付けた学習を進めることが目標になっています。生徒はこの学習を

進め、歴史的事象と自身の生活に関連を理論的に見出し、社会への働きかけ方を実践を通して学ぶことで、自身の生活や社会を改善していく姿勢を身に着けることができると考えます。これらのことから、教師は現代社会の出来事や生徒の生活を知り、それらと学習内容を結びつける研究を日常的に行わなければならないと改めて感じました。生徒と同じ目線で社会から課題を発見し、歴史分野から学ぶことはないか、教師が事前に考察し教材へ落とし込むことで、生徒はレリバンスを持って歴史学習に臨むことができると考えます。また同時に、より生徒の身の回りの事象と歴史的事象を密接に関係づけるために、歴史的事象の背景についても詳細に知っておくことが求められます。自身が行うべきこととして以上の二つ、社会を見る視点を構築すること、学習内容の歴史について深く学び考察することが挙げられると考えました。

3. 「アンケート結果」に基づく授業改善について

本授業では、主に歴史教育に関する「理論と実践の往還」を体現するための授業力の基礎の育成を目指していた。特に、理論としては歴史教育におけるレリバンス概念について、論文集をまとめたテキストに基づいて考察を試みた。アンケート結果に基づく授業改善の方法としては、各授業後に授業内で行った議論の成果をふまえ、授業改善プランを開発し実践に基づく検証を行うというサイクルの構築が有効であると考えられる。また、受講生の「本授業の振り返り」の記述内容から理論に基づく授業開発研究の方法について具体的に理解を深める指導の充実が必要であることが示唆される。